

月夜のでんしんばしら

ある晩 [ばん]、恭一 [きやういち] はざうりをはいて、すたすた鉄道線路 [てつどうせんろ] の横 [よこ] の平 [たひ] らなところをあるいて居 [を] りました。

たしかにこれは罰金 [ばつきん] です。おまけにもし汽車 [きしや] がきて、窓 [まど] から長 [なが] い棒 [ぼう] などがでてゐたら、一ぺんになぐり殺 [ころ] されてしまつたでせう。

ところがその晩 [ばん] は、線路 [せんろ] 見 [み] まはりの工夫 [こうふ] もこず、窓 [まど] から棒 [ぼう] の出 [で] た汽車 [きしや] にもあひませんでした。そのかはり、どうもじつに変 [へん] てこなものを見 [み] たのです。

九日 [こゝのか] の月 [つき] がそらにかゝつてゐました。そしてうろこ雲 [ぐも] が空 [そら] いつぱいでした。うろこぐもはみんな、もう月 [つき] のひかりがはらわたの底 [そこ] までもしみとほつてよろよろするといふふうでした。その雲 [くも] のすきまからときどき冷 [つめ] たい星 [ほし] がぴつかりぴつかり顔 [かほ] をだしました。

恭一 [きやういち] はすたすたあるいて、もう向 [むか] ぶに停車場 [ていしやば] のあかりがきれいに見 [み] えるところまできました。ぼつんとしたまつ赤 [か] なあかりや、硫黄 [いわう] のほのほのやうにぼうとした紫 [むらさき] いろのあかりやらで、眼 [め] をほそくしてみると、まるで大 [おほ] きなお城 [しろ] があるやうにおもはれるのでした。

とつぜん、右手 [みぎて] のシグナルばしらが、がたんとからだをゆすぶつて、上 [うへ] の白 [しろ] い横木 [よこぎ] を斜 [なゝめ] に下 [した] の方 [ほう] へぶらさげました。これはべつだん不思議 [ふしぎ] でもなんでもありません。

つまりシグナルがさがつたといふだけのことです。一晚 [ひとばん] に十四回 [じふしくわい] もあることなのです。

ところがそのつぎが大 [たい] へんです。

さつきから線路 [せんろ] の左 [ひだり] がはで、ぐわあん、ぐわあんとうなつてあたでんしんばしらの列 [れつ] が大威張 [おほゐば] りで一 [いつ] ペんに北 [きた] のほうへ歩 [ある] きだしました。みんな六 [む] つの瀬戸 [せと] ものゝエポレットを飾 [かざ] り、てつぺんにはりがねの槍 [やり] をつけた亜鉛 [とたん] のしやつぽをかぶつて、

片脚 [かたあし] でひよいひよいやつて行 [い] くのす。そしていかにも恭一 [きやういち] をばかにしたやうに、じろじろ横 [よこ] めでみて通 [とほ] りすぎます。

うなりもだんだん高 [たか] くなつて、いまはいかにも昔 [むかし] ふうの立派 [りつぱ] な軍歌 [ぐんか] に変 [かは] つてしまひました。

「ドツテテドツテテ、ドツテテド、

でんしんばしらのぐんたいは

はやさせかいにたぐひなし

ドツテテドツテテ、ドツテテド

でんしんばしらのぐんたいは

きりつせかいにならびなし。」

一 | 本 [ほん] のでんしんばしらが、ことに肩 [かた] をそびやかして、まるでうで木 [ぎ] もがりがり鳴 [な] るくらゐにして通 [とほ] りました。

みると向 [むか] ふの方 [ほう] を、六 | 本 [ほん] うで木 [ぎ] の二十二の瀬戸 [せと] ものゝエポレットをつけたでんしんばしらの列 [れつ] が、やはりいつしよに軍歌 [ぐんか] をうたつて進 [すす] んで行 [い] きます。

「ドツテテドツテテ、ドツテテド

二 | 本 [ほん] うで木 [ぎ] の工兵隊 [こうへいだい]

六本 [はん] んうで木 [ぎ] の龍騎兵 [りうきへい]

ドツテテドツテテ、ドツテテド

いちれつ一 | 万 [まん] 五 | 千人 [せんにん]

はりがねかたくむすびたり」

どういふわけか、二 | 本 [ほん] のはしらがうで木 [ぎ] を組 [く] んで、びつこを引 [ひ] いていつしよにやつてきました。そしていかにもつかれたやうにふらふら頭 [あたま] をふつて、それから口 [くち] をまげてふうと息 [いき] を吐 [つ] き、よろよろ倒 [たふ] れさうになりました。

するとすぐうしろから来 [き] た元気 [げんき] のいゝはしらがどなりました。

「おい、はやくあるけ。はりがねがたるむぢやないか。」

ふたりはいかにも辛 [つら] さうに、いつしよにこたへました。

「もうつかれてあるけない。あしさが腐 [くさ] り出 [だ] したんだ。長靴 [ながぐつ] のタールもなにももうめちやくちやになつてるんだ。」

うしろのはしらはもどかしさうに叫 [さけ] びました。

「はやくあるけ、あるけ。きさまらのうち、どつちかが参 [まゐ] つても一 | 万 [まん] 五 | 千人 [せんにん] みんな責任 [せきにん] があるんだぞ。あるけつたら。」

二人 [ふたり] はしかたなくよろよろあるきだし、つぎからつぎとはしらがどンドンやつて来 [き] ます。

「ドツテテドツテテ、ドツテテド

やりをかざれるとたん帽 [ぼう]

すねははしらのごとくなり。

ドツテテドツテテ、ドツテテド

肩 [かた] にかけたるエポレット

重 [おも] きつとめをしめすなり。」

二人 [ふたり] の影 [かげ] ももうずうつと遠 [とほ] くの緑青 [ろくせう] いろの林 [はやし] の方 [ほう] へ行 [い] つてしまひ、月 [つき] がうろこ雲 [ぐも] からぱつと出 [で] て、あたりはにはかに明 [あか] るくなりました。

でんしんばしらはもうみんな、非常 [ひじやう] なご機嫌 [きげん] です。恭一 [きや

ういち]の前[まへ]に来[く]ると、わざと肩[かた]をそびやかしたり、横[よご]めでわらつたりして過[す]ぎるのでした。

ところが愕[おど]ろいたことは、六|本[ぼん]うで木[ぎ]のまた向[むか]ふに、三|本[ぼん]うで木[ぎ]のまつ赤[か]なエポレットをつけた兵隊[へいたい]があるいてゐることです。その軍歌[ぐんか]はどうも、ふしも歌[うた]もこつちの方[はう]とちがふやうでしたが、こつちの声[こゑ]があまり高[たか]いために、何[なん]をうたつてゐるのか聞[き]きとることができませんでした。こつちはあひかはらずどんどんやつて行きます。

「ドツテテドツテテ、ドツテテド、
寒[さむ]さはだえをつんざくも
などで腕木[うでぎ]をおろすべき
ドツテテドツテテ、ドツテテド
暑[あつ]さ硫黄[いわう]をとかすとも
いかでおとさんエポレット。

どんだんだんだんやつて行[い]き、恭一[きやういち]は見[み]てゐるのさへ少[す]

こ] しつかれてほんやりになりました。

でんしんばしらは、まるで川 [かは] の水 [みづ] のやうに、次 [つぎ] から次 [つぎ] とやつて来 [き] ます。みんな恭一 [きやういち] のことを見 [み] て行 [ゆ] くのですけれども、恭一 [きやういち] はもう頭 [あたま] が痛 [いた] くなつてだまつて下 [した] を見 [み] てみました。

俄 [には] かに遠 [とほ] くから軍歌 [ぐんか] の声 [こゑ] にまぢつて、「お一二、お一二、」といふしわがれた声 [こゑ] がきこえてきました。恭一 [きやういち] はびつくりしてまた顔 [かほ] をあげてみますと、列 [れつ] のよこをせいの低 [ひく] い顔 [かほ] の黄 [き] いろなぢいさんがまるでぼろぼろの鼠 [ねづみ] いろの外套 [ぐわいたふ] を着 [き] て、でんしんばしらの列 [れつ] を見 [み] まはしながら「お一二、お一二、」と号令 [がうれい] をかけてやつてくるのでした。

ぢいさんに見 [み] られた柱 [はしら] は、まるで木 [き] のやうに堅 [かた] くなつて、足 [あし] をしやちほこばらせて、わきめもふらず進 [すす] んで行 [い] き、その変 [へん] なぢいさんは、もう恭一 [きやういち] のすぐ前 [まへ] までやつてきました。そしてよこめでしばらく恭一 [きやういち] を見 [み] てから、でんしんばしらの方 [は

う] へ向 [む] いて、

「なみ足 [あし] い。おいつ。」と号令 [がうれい] をかけました。

そこででんしんばしらは少 [すこ] し歩調 [ほてう] を崩 [くづ] して、やつぱり軍歌 [ぐんか] を歌 [うた] つて行 [い] きました。

「ドツテテドツテテ、ドツテテド、

右 [みぎ] とひだりのサアベルは

たぐひもあらぬ細身 [ほそみ] なり。」

ぢいさんは恭一 [きやういち] の前 [まへ] にとまつて、からだをすこしかぶめました。

「今晚 [こんばん] は、おまへはさつきから行軍 [かうぐん] を見 [み] てゐたのかい。」

「えゝ、見 [み] てました。」

「さうか、ぢや仕方 [しかた] ない。ともだちにならう、さあ、握手 [あくしゆ] しよう。」

ぢいさんはぼろぼろの外套 [ぐわいたふ] の袖 [そで] をはらつて、大 [おは] きな黄 [き] いろな手 [て] をだしました。恭一 [きやういち] もしかたなく手 [て] を出 [だ] しました。ぢいさんが「やつ、」と云つてその手 [て] をつかみました。

するとぢいさんの眼 [め] だまから、虎 [とら] のやうに青 [あを] い火花 [ひばな]

がぱちぱちつとでたとおもふと、恭一 [きやういち] はからだがりりつとしてあぶなくうしろへ倒 [たふ] れさうになりました。

「ははあ、だいぶひびいたね、これでごく弱 [よわ] いほうだよ。わしとも少 [すこ] し強 [つよ] く握手 [あくしゆ] すればまあ黒焦 [くろこ] げだね。」

兵隊 [へいたい] はやはりずんずん歩 [ある] いて行 [い] きます。

「ドツテドツテテ、ドツテド、

タールを塗 [ぬ] れるなが靴 [くつ] の

歩 [ほ] はばは三 | 百 [びやく] 六 | 十尺 [じうしやく]。」

恭一 [きやういち] はすつかりこわくなつて、齒 [は] ががちがち鳴 [な] りました。ぢいさんはしばらく月 [つき] や雲 [くも] の工合 [ぐあひ] をながめてゐましたが、あまり恭一 [きやういち] が青 [あを] くなつてがたがたふるえてゐるのを見 [み] て、氣 [き] の毒 [どく] になつたらしく、少 [すこ] ししづかに斯 [か] う云 [い] ひました。

「おれは電気総長 [でんきそうちやう] だよ。」

恭一 [きやういち] も少 [すこ] し安心 [あんしん] して

「電気総長 [でんきそうちやう] といふのは、やはり電気 [でんき] の一種 [いつしゆ]

ですか。」ときゝました。するとぢいさんはまたむつとしてしまひました。

「わからん子供〔こども〕だな。ただの電気〔でんき〕ではないさ。つまり、電気〔でんき〕のすべての長〔ちやう〕、長〔ちやう〕といふのはかしらとよむ。とりもなほきず電気〔でんき〕の大將〔たいしやう〕といふことだ。」

「大將〔だいしやう〕ならずゐぶんおもしろいでせう。」恭一〔きやういち〕がぼんやりたづねますと、ぢいさんは顔〔かほ〕をまるでめちやくちやにしてよろこびました。

「はつはつは、面白〔おもしろ〕いさ。それ、その工兵〔こうくい〕も、その竜騎兵〔りうきへい〕も、向〔むか〕ふのてき弾兵〔たんべい〕も、みんなおれの兵隊〔へいたい〕だからな。」

ぢいさんはぷつとすまして、片〔かた〕つ方〔ぼう〕の頬〔ほほ〕をふくらせてそらを仰〔あふ〕ぎました。それからちやうど前〔まへ〕を通〔とほ〕つて行〔い〕く一―本〔ほん〕のでんしんばしらに、

「こらこら、なぜわき見〔み〕をするか。」とどなりました。するとそのはしらはまるで飛〔と〕びあがるぐらゐびつくりして、足〔あし〕がぐにやんとまがりあわてゝまつすぐを向〔む〕いてあるいて行〔い〕きました。次〔つぎ〕から次〔つぎ〕とどしどしはしら

はやつて来 [き] ます。

「有名 [いうめい] なはなしをおまへは知 [し] つてるだらう。そら、むすこが、England、ロンドンにゐて、おやじがスコットランド、カルクシャイヤにゐた。むすこがおやじに電報 [でんぱう] をかけた、おれはちやんと手帳 [てちやう] へ書 [か] いておいたがね、」

ぢいさんは手帳 [てちやう] を出 [だ] して、それから大 [おほ] きなめがねを出 [だ] してもつともらしく掛 [か] けてから、また云 [い] ひました。

「おまへは英語 [えいご] はわかるかい、ね、センド、マイブーツ、インスタンテウリイすく長靴 [ながぐつ] 送 [おく] れとかうだらう、するとカルクシャイヤのおやじめ、あわてくさつておれのでんしんのはりがねに長靴 [ながぐつ] をぶらさけたよ。はつはつは、いや迷惑 [めいわく] したよ。それから英国 [えいこく] ばかりぢやない、十二 | 月 [ぐわつ] ころ兵營 [へいえい] へ行 [い] つてみると、おい、あかりをけしてこいと上等兵殿 [じやうとうへいどの] に云 [い] はれて新兵 [しんぺい] が電燈 [でんたう] をふつふつと吹 [ふ] いて消 [け] さうとしてゐるのが毎年 [まいねん] 五 | 人 [にん] や六 | 人 [にん] はある。おれの兵隊 [へいたい] にはそんなものは一人 [ひとり] もないから

な。おまへの町 [まち] だつてさうだ、はじめて電燈 [でんたう] がついたころはみんながよく、電気会社 [でんきくわいしや] では月 [つき] に百石 [ひやくこく] ぐらゐ油 [あぶら] をつかふだらうかなんて云 [い] つたもんだ。はつはつは、どうだ、もつともそれはおれのやうに勢力不滅 [せいりよくふめつ] の法則 [はふそく] や熱力学第二則 [ねつりきがくだいにそく] がわかるとあんまりおかしくもないがね、どうだ、ぼくの軍隊 [ぐんたい] は規律 [きりつ] がいゝだらう。軍歌 [ぐんか] にもちやんとさう云 [い] つてあるんだ。」

でんしんばしらは、みんなまつすぐを向 [む] いて、すまし込 [こ] んで通 [とほ] り過 [す] ぎながら一 [ひと] きわ声 [こゑ] をはりあげて、

「ドツテテドツテテ、ドツテテド

でんしんばしらのぐんたいの

その名 [な] せかいにとゞろけり。」

と叫 [さけ] びました。

そのとき、線路 [せんろ] の遠 [とほ] くに、小 [ちい] さな赤 [あか] い二 [ふた] つの火 [ひ] が見 [み] えました。するとぢいさんはまるであわてゝしまひました。

「あ、いかん、汽軍 [きしや] がきた。誰 [たれ] かに見附 [みつ] かつたら大 [たい] へんだ。もう進軍 [しんぐん] をやめなくちやいかん。」

ぢいさんは片手 [かたて] を高 [たか] くあげて、でんしんばしらの列 [れつ] の方 [ほう] を向 [む] いて叫 [さけ] びました

「全軍 [ぜんぐん]、かたまれい、おいつ。」

でんしんばしらはみんな、ぴつたりとまつて、すつかりふだんのとほりになりました。軍歌 [ぐんか] はただのぐわあぐわあんといふうなりに変 [かは] つてしまひました

汽車 [きしや] がごうとやつてきました。汽罐車 [きくわんしや] の石炭 [せきたん] はまつ赤 [か] に燃 [も] えて、そのまへで火夫 [くわふ] は足 [あし] をふんばつて、まつ黒 [くろ] に立 [た] つてゐました。

ところが客車 [きやしや] の窓 [まど] がみんなまつくらでした。するとぢいさんがいきなり、

「おや、電燈 [でんたう] が消 [あ] えてるな。こいつはしまつた。けしからん。」と云 [い] ひながらまるで兎 [うさぎ] のやうにせ中 [なか] をまんまるにして走 [はし] つてゐる列車 [れつしや] の下 [した] へもぐり込 [こ] みました

「あぶない。」と恭一 [きやういち] がとめやうとしたとき、客車 [きやくしや] の窓 [まど] がぱつと明 [あか] るくなつて、一人 [ひとり] の小 [ちい] さな子 [こ] が手 [て] をあげて

「あかるくなつた、わあい。」と叫 [さけ] んで行 [い] きました。

でんしんばしらはしづかにうなり、シグナルはがたりとあがつて、月 [つき] はまたうろこ雲 [ぐも] のなかにはいりました。

そして汽車 [きしや] は、もう停車場 [ていしやば] へ着 [つ] いたやうでした。

■このファイルについて

標題：月夜のでんしんばしら

著者：宮澤賢治

本文：「注文の多い料理店」

発行：大正十三年十二月一日

販売元：杜陵出版部／東京光原社

新選 名著復刻全集 近代文学館 昭和51年4月1日 発行
(第14刷)

表記：原文の表記を尊重しつつ、以下のように扱います。

○誤字・脱字等は訂正せず、底本通りとしました。

○本文のかなづかいは、底本通りとしました。

○旧字体は、現行の新字体に替えました。ただし、新字体に替えなかった漢字もあります。

新字体がない場合は、旧字体をそのまま用いました。

○繰り返し記号／＼は用いず、同語反復としました。

入力：今井安貴夫

ファイル作成：里実工房

公開：里実文庫 2005年12月28日